季刊誌 神奈川芸術劇場

モノ・人・まちをつくる創造型劇場KAATの広報紙

ひらかれた
劇場へ。

KAAT PAPER

2021 冬

特集 芸術を愛し、街を愛す

対談「街と芸術の関わりとは」田井昌伸（野毛大道芸実行委員長）×長塚圭史

●街と芸術を愛すること　●YPAMって知ってる？　●YPAMはここが面白い！　●神奈川へ、会いに〈ホテルニューグランド〉
●KAATでYPAMを楽しむ　●今日はKAATに何しに来たの？　●ただいまKAAT準備中　●REVIEW　●公演スケジュール

街と芸術を愛すること

文＝尾上そら

芸術祭のある街を楽しみ、その街をもっと好きになろう

世界各地で開催されている芸術祭。訪れる人は、アートとともに街を知り、その街に暮らす人はアートをより身近に感じられる祭典です。神奈川県でも毎年、数多く開催されていますが、そもそも街と芸術祭ってどんな関係なのでしょうか。世界各地の芸術祭をおさらいしながら、街と芸術祭の関係を紐解きます。

家を建て、家族や近隣に暮らす人が増え、集落ができる。荒れ地や森を開墾し、それらは田畑や牧場となり、土地はさらに拓かれて小さな村と村とが繋がり、町になっていく。やがて自然と人との距離は大きく離れ、人工的な建造物が生活域を席巻し、それらは周辺を飲み込みながら、大きな街へと姿を変える。

都市圏に生きる人にとって、暮らしで大切なものは職場や商業地域への近さ、交通の利便性、治安などだろうか。けれど、便利なものに囲まれていれば暮らしが豊かになる、というものでもない。自然に近しく暮らしていた時代、人は収穫や漁獲に感謝し、禍や病を遠ざけ、穢れを祓って平穏が続くよう祈る、その想いを種々の祭礼を介して神仏や自然そのものに届けようとした。祭りは神聖な行事であると同時に、人々にとってはハレの場だ。舞いや音楽、晴れ着に飾り、ご馳走の数々。束の間の華やかな時間に心と体を満たし、また暮らしへと戻っていく。

それら古来からの祭りは今も世界各地で続き、人々を癒したり楽しませたりしている。では私たちが生きる現代ではどうだろうか。思い浮かんだのが芸術祭、演劇祭だった。

規模や方向性もさまざまに、国内外あらゆるところに芸術祭、演劇祭はある。演劇好きだったら海外ではスコットランドのエディンバラ、フランスのアビニョン、ルーマニアのシビウあたりの名がすぐに上がるだろう。国内では、毎年GW時期開催の静岡芸術劇場を中核とする「ふじのくに⇆せかい演劇祭」と、それに連携し駿府城公園など中心街のあちこちで野外パフォーマンスが行われる「ストレンジシード静岡」、瀬戸内の島々で最先端のアートに出会える「瀬戸内国際芸術祭」、まだ歴史は浅いが海・山・高原まで有する兵庫県豊岡市全域を会場とする「豊岡演劇祭」、そしてご当地で言えば「横浜トリエンナーレ」に「YPAM」と、新旧大小数え始めるとキリがない。

多くの人が一つの事象を願い祈る古くからの祭礼と違い、アートと対峙する芸術祭、演劇祭は参加する側の関心の持ち方、知識や体験の量で得るものが異なる。暮らしの中では出会えない刺激的な表現は、時に鑑賞者の価値観を大きく変えるかも知れない。言葉にできずに抱え込んでいた想いや感情に、名前をつけられるようになることもあるだろう。あるいは会場となる町＝街、そこに住む人々の新たな魅力に気づく機会となることも。種々の境を越え、多くの人が訪れて賑わいを生み、創り手たちの想いのこもった作品と出会い、交流し、それぞれ「何か」を持ち帰る。海や大地から与えられるものとは、また違った「恵み」を。

街で暮らしていると、何処が自分の居るべき場所か、自分の形がどんなものだったか、ふと心許なくなる瞬間がある。そんな、自分の内に生じた虚ろなものに立ち向かう勇気となる恵みと出会うために、アートを祀る現代の祭りは最高の効能を発揮するのだ。

いつか行ってみたい、世界のいろんな芸術祭。

1 エディンバラ・フェスティバル（イギリス）

1947年頃から、スコットランドの首都・エディンバラで毎年８月に開催される、演劇、音楽、コメディー、映画、現代美術などの複数の芸術祭の総称。この街では夏以外も年間を通じて様々な祭典が行われている。

2 クンステン・フェスティバル（ベルギー）

ブリュッセルで毎年５月に行われる、パフォーミング・アーツを中心とした現代アートフェスティバル。ヨーロッパが拠点の実力派若手アーティストの発掘や支援、作品のプロデュースを行い、先鋭的なプログラムも多数。

3 テアタートレッフェン（ドイツ）

1964年からベルリンで行われる演劇フェスティバル。毎年約400作品の中から選ばれる10の演出作品の上演のほか、戯曲マーケット、国際フォーラム、演劇関係者のためのワークショップなど多彩なプログラムが行われる。

4 CINARS（カナダ）

ケベック州モントリオールの国際舞台美術見本市。1984年から隔年で開催され、地元カナダのカンパニーを中心に、世界60カ国から1,000人以上のアーティストやプレゼンターが集う、最大規模の見本市。

5 ふじのくに⇆せかい演劇祭（静岡）

SPAC―静岡県舞台芸術センター芸術総監督宮城聰氏がディレクターを務める国際演劇祭。世界の演劇、ダンスの招聘、SPAC作品の上演ほか、「ストリートシアターフェスティバル・ストレンジシード静岡」と同時開催している。

6 豊岡演劇祭（兵庫）

「演劇のまち」豊岡市を中心に開催される『まちづくりと連動した』演劇祭。劇場のみならず、神社の境内やキャンプ場など屋内外問わずまちのそこかしこで公演が行われる。「芸術文化」と「観光」を学ぶ芸術文化観光専門職大学の実習の場にもなっている。

7 FESTA松本（長野）

2021年から松本市でスタートした演劇祭。まつもと市民芸術館総監督の串田和美氏が総合ディレクター。劇団、演劇関係者や松本市民、ボランティアスタッフが一体となり作り上げる“演劇的お祭り”。

8 瀬戸内国際芸術祭（香川・岡山）

瀬戸内海の島々を舞台に、2010年から3年ごとに開催される現代アートの国際芸術祭。芸術祭をサポートするボランティア団体「こえび隊」や、地元の市民が多く参加。2019年は世界中から118万人が来場した。

YPAMって知ってる?

取材・文＝島貫泰介

実は、日本を代表するパフォーミングアーツの催しです

横浜を中心に、毎年開催されている「YPAM(TPAM)」は、多くの舞台関係者やファンが注目する、パフォーミングアーツの国際的なイベントです。ところで、「YPAM」ってどんなことをしているんでしょうか。いつから始まったの? 一般の人も参加できるの? YPAMの謎を解明して、YPAMを楽しみましょう。

YPAM(ワイパム)とは「Yokohama International Performing Arts Meeting(横浜国際舞台芸術ミーティング)」の頭文字からとったニックネーム。その名が示すとおり、演劇やダンスなどの舞台芸術を扱う国際的なイベントだが、フェスティバルではなくミーティングをうたうところに大きな特徴がある。さらに今回、これまで親しまれた略称のTPAM(ティーパム)をYPAMに変えるのも大きな変化だ。

「T」が「Y」になるまで、YPAM / TPAMはじつに26年の時間を重ねてきた。これまでを駆け足で振り返りながら、YPAMの現在地を考えていきたい。

TPAMが始まったのは、じつは横浜ではなく1995年の東京。さらにMの意味はミーティングではなくマーケットで、名称も「芸術見本市」(Tokyo Performing Arts Market / TPAM)。つまり、国内外のプロデューサーが話題作を買い付けて各国の公共劇場などに招聘するための見本市というのが、最初の位置づけだった。10年間の活動を経て「東京芸術見本市」に改称したのが2005年。公式プログラムをジャンルごとに分けてそれぞれに選任ディレクターを就け、さらに現在も続く公募プログラム「TPAMフリンジ(当時はTPAMショーケース)」をスタート。新進の劇団、グループ、若いアーティストにも広く門戸を開いたのがこの年だ。

表現者たちのための機会創出の場として定着したTPAMは、そこから視野を広げ、プロデューサーやコーディネーターといった制作者たちも含めた国際的に開かれたネットワークづくりに着手する。2009年にはアジア地域のプロフェッショナルによるネットワーキングをテーマとする国際会議「舞台芸術制作者ネットワーク会議」を併催。2000年代後半とは、現在のYPAMにも引き継がれている「ミーティング」性の揺籃期と言えるだろう。数年に一度開催されるフェスティバルの非日常感、華々しさに目を向けつつも、より強く長く続いていく舞台芸術のインフラをつくりだすための、多様な人々が集まるプラットフォーム。そのかたちが次第に見えてきたのが2000年代である。

この方向性をさらに強めたのが、東日本大震災発生と同年の2011年。長らく拠点としていた東京を離れて横浜に移ったTPAMは、略称はそのままに「国際舞台芸術ミーティング in 横浜」(Performing Arts Meeting in Yokohama)と改称。さらに複数名のディレクターがコンセプト段階から企画を組み立てていく「TPAMディレクション」をスタート。ディレクターごとの専門性や社会への関心が反映した作品ラインナップは観客や参加者たちの好奇心を大いに刺激した。YPAM / TPAMディレクターを務める丸岡ひろみが「ミーティングが盛り上がるには、みんなで作品を見る経験が重要。それを土台にして批評や議論することから交流が生まれる」と述べているように、ここは作品とミーティングの相乗効果が生まれる場所なのだ。ちなみにかつてのBankART Studio NYK近くにあったバー、AMAZON CLUBは参加者たちの夜の溜まり場で、合言葉は「AMAZON CLUBで会いましょう!」だったとか。

KAATをはじめ、横浜市内のさまざまな劇場・施設で展開していったTPAM。2015年には東南アジア諸地域との国際共同製作「アジア・フォーカス」がスタート。カンヌ国際映画祭で最高賞を受賞したアピチャッポン・ウィーラセタクンの舞台作品『フィーバー・ルーム』を日本ではじめて上演したのもTPAMで、彼の他にも、シンガポールのホー・ツーニェン、マレーシアのマーク・テ、タイのピチェ・クランチェンなど、国際的なアーティストの新作・話題作に横浜でいち早く出会えるのもTPAMの魅力だ。

そして2021年。コロナ禍を経て、新たなスタートをきるYPAMが掲げるのが、公募プログラムである「YPAMフリンジ」の強化だ。審査のない同プログラムでは、若手団体からベテランまでの多種多彩なジャンルのパフォーマンスが発表される。現在の会場は横浜だけでなく隣接する東京も含むが、今後は横浜に限定し、いま・ここでしか見れない表現と観客をつなげるネットワークを形成していく。さらに開催地である横浜とそこで暮らす人とのつながりに重点を置き、3年から5年をかけてコミュニティと共にある表現を探っていくとのことだ。

もちろん、これまで続けてきた作品製作のチャレンジも続く。重度身体障碍者によるカンパニー「劇団態変」の最新三部作『さ迷える愛・序破急』の一挙上演&ライブ配信に加え、アーティストコレクティブ「オル太」によるゲームとインスタレーションを合わせた『生者のくに』、中国新世代のパフォーマンス作家であるヤン・ジェンは、他国に移住した華僑・華人のアイデンティティを世界各地の中華街でリサーチする『Jasmine Town』に着手する。オル太は今年発表した新作の再演、ヤン・ジェンの作品は次回のYPAMが世界初演となる。クリエーションとネットワークの両面から、これまで受け継がれてきたYPAM / TPAMの精神が感じられるはずだ。

アピチャッポン・ウィーラセタクン『フィーバー・ルーム』
Courtesy of Kick the Machine Films

YPAMはここが面白い!

取材・文＝島貫泰介

YPAM⇄世界! 豊かな国際性

国内外の話題作が連日上演される期間中の横浜には、欧米、アジア、南米など海外アーティストや制作者が世界中からやってくる。豊かな国際性は横浜の特徴だが、そこにパフォーミングアーツという新たな要素が加わり、街の表情をいっそう輝かせるのがYPAMのスペシャルなポイントだ。

さらに、かれらは上演や作品を観るためだけにやってくるのではない。「YPAMエクスチェンジ」と呼ばれる数日間のネットワーキングプログラムでは、国際会議や芸術文化にかかわるシンポジウム、アーティストや制作者による新しいプロジェクトのプレゼンテーションなど大小さまざまなイベントが行われる。海外アートシーンの動向や、未知のアーティストの活動に触れることで得られた知見が、数年後の招聘公演や新作発表につながることもあれば、ここで海外とのコネクションを得て、海外進出のチャンスを掴む日本の劇団・カンパニーも少なくない。YPAMのミーティング性を象徴するのがYPAMエクスチェンジであり、そのアクティブな交流は国際性によって生まれている。

近年では、横浜での交流に刺激を受けたタイのアーティスト/プロデューサーが、首都バンコクで「BIPAM」を立ち上げ、東南アジアにおけるプラットフォームを目指している。YPAM / TPAMの蒔いた種は世界に広がっている。

政治や文化、多彩なテーマのプログラム

YPAMは4つのプログラムで構成されている。「YPAMディレクション」は、YPAM本体が企画・製作に関わった作品を上演するプログラムで、今日のアートシーンや社会において考えるべきテーマに基づく作品を通して、舞台芸術関係者や観客間で議論を共有することをミッションにしている。俳優・パフォーマーがすべて重度身体障碍者である「劇団態変」によって上演される『さ迷える愛・序破急』三部作はその一例で、手放しで礼賛される昨今のダイバーシティ(多様性)やソーシャル・インクルージョン(社会包摂)に批評的な一石を投じるだろう。

横浜の文化芸術団体と提携するのが「YPAM連携プログラム」。1996年に始まったヨコハマダンスコレクションなどと協働し、コロナ禍を経た身体のありようを問う。

「国際性」の項でも紹介した「YPAMエクスチェンジ」は、世界のアートシーンの今に触れられるプレゼンテーションやミーティングが特徴だが、YPAMがとくに取り上げたいと考えるテーマでの基調講演も行われる。横浜とのつながりが意識される今回は、NPO「無国籍ネットワーク」を主宰する陳天璽(ちんてんじ)を招き、日本国内における無国籍者の状況、文化的・政治的意味、かれらが抱くアイデンティティなどが語られた。

さらに公募プログラムである「YPAMフリンジ」では、若手からベテランまでの多彩なアーティストたちの作品が彩りを加える。この4つの柱の全体性がYPAMなのだ。

今年のYPAMの見どころは?

12月17日から19日までKAATで上演される、劇団態変の最新三部作『さ迷える愛・序破急』。TPAMと劇団態変の繋がりは長く、実は1995年のTPAM第1回目の公演から始まっている。そして2021年、YPAMとして再びスタートする記念すべき第1回目での登場となった。本作は、劇団態変を率いる金満里が、2016年に相模原の障碍者施設でおきた大量殺人事件に衝撃を受け、これまで避けていた「愛」をテーマに取り組んだ。深部まで分け入り「愛」を考察し、身体障碍者でしか演じられない表現を追究し辿り着く舞台だ。なお第一部『翠晶の城』には公募で選ばれた身障者エキストラが出演し、第二部『箱庭弁当』では捨てられた弁当の具が旅に出る。そして完結編『心と地』は宇宙が舞台のSF作品。そのほか、ゲームとプレイングインスタレーションで上演されるオル太の『生者のくに』、カンパニーデラシネラの無言劇『TOGE』なども。

『さ迷える愛・序破急』　劇団態変
12月17日(金)－19(日)
KAAT神奈川芸術劇場<ホール>

劇団態変『翠晶の城–さ迷える愛・序』©bozzo

KAATでYPAMを楽しむ

KAATでも、こんな公演を上演しました！

『福島三部作』
第一部『1961年：夜に昇る太陽』
第二部『1986年：メビウスの輪』
第三部『2011年：語られたがる言葉たち』

2021年 2月9日（火）— 14日（日）
KAAT神奈川芸術劇場〈大スタジオ〉
ライブ配信・録画配信

東日本大震災から10年目 コロナ渦でも世界に届けられた

東日本大震災、福島第一原発事故から10年、さらにコロナ渦での開催となったTPAM2021。無観客含め6日間にわたって、KAATで上演されたのはDULL-COLORED POPによる『福島三部作』。福島県生まれの谷賢一が2年半にわたって取材を重ね、1961、1986、2011年の福島を舞台に、ある家族と原発の物語を描いた。全6時間にもなる大作のため、再演不可能とも言われていたが、リアルでの劇場上演に加え、英語字幕付きでのライブ・録画配信も行われた。

撮影=前澤秀登

『1417年から陽気さを輸出し続けて：世界征服のための一理論』

2018年 2月16日（金）— 17日（土）
KAAT神奈川芸術劇場〈大スタジオ〉ほか

KAAT→伊勢佐木町に飛び出し 参加者とパーティーへ！

2018年、フィリピン・マニラからやって来たのは著述家ジェシカ・ザフラと映画作家のラヤ・マーティン。フィリピンでは“人”が最大の輸出物であり、フィリピン人外国労働者（Overseas Fillipino Workers）は200万人以上とされる。さらに約5万人のOFWが世界のリーダーたちが座る椅子、「権力の座」の埃を払っているのだ。もしOFWによる座り込みストライキが組織されれば、国際危機を引き起こし経済を手中に収め、フィリピンに有利になる交渉の鍵を握ることができるだろう…と、KAATにてレクチャー・パフォーマンス。その後、横浜周辺に住むOFWたちに人気のレストラン、伊勢佐木町「Bayani's Kitchen」に移動しパーティーを開催。その全てが作品であった。

撮影=古屋和臣

『不産主義』

2019年 2月15日（金）
KAAT神奈川芸術劇場〈大スタジオ〉

境界を超え複雑に混じり合う 音響、映像、テクスト、身体

平成最後のTPAM2019にはドクメンタ14と世界芸術アカデミーの支援を受けて制作された『不産主義』が登場。テーム・テムリッツが舞台に現れ、スクリーン脇で静かに機材を操作して86分の映像作品を上映し、Q&Aを行うという、アンチライブ・オーディオビジュアル・パフォーマンス。「子を持つことは非倫理的である」「家族は民主主義を不可能にする」という2つの前提のもと、LGBT運動の主張と家父長制イデオロギー、資本主義における生物学的な再生産と文化的生産の間の対立を分析。そして再生産しないことを選ぶ人々への文化的擁護を提案した。

※YPAM2021では、12月14日のYPAMエクスチェンジ「ショー・マスト・ゴー・オン」に登壇予定。

Comatonse Recordings

KAATとYPAMの隠されたエピソード

KAATは、YPAM（TPAM）のメイン会場のひとつ。
先鋭的な作品が多く、劇場としても挑戦が続きました。
その秘話をKAAT事業部長 / 技術監督 堀内真人氏が回想しました。

取材・文＝島貫泰介

KAATのクリエイション力を鍛えた、実験的な作品たち

横浜に拠点を移して以来、とくに大規模なYPAM作品が上演されてきたのがKAATである。それを支えてきた劇場の舞台技術スタッフへの評価は高く、海外アーティストからの信頼も厚い。

舞台と客席の関係を逆転させ、俳優が一人も登場しないという実験作『フィーバー・ルーム』の日本初演では、作家のアピチャッポン・ウィーラセタクン自ら「KAATで上演することで作品が一段高いレベルに達した」と絶賛し、のちに行われた東京芸術劇場での再演時にも、KAATスタッフが参画することになったというのだから、その実力がうかがえる。

2016年にKAATで世界初演されたピチェ・クランチェン『Dancing with Death』では、クリエーションの立ち上げからKAATが関わり、技術監督である堀内真人自らピチェの住むタイに出向き、綿密な体制で作品を完成に導いた。堀内曰く、「TPAMに招聘されてきた海外アーティストとのやりとりは、私たちが持っている演劇や劇場の概念を拡張させる経験のオンパレード。そこでは苦労も問題もたくさん発生するが、そこにこそ本質的な価値があるんです。TPAMと共に、KAATのスタッフも成長してきたと思います」。

梅田哲也『インターンシップ』 ©Rody Shimazaki

舞台機構やスタッフ自体も、表現の一部に

堀内がとくに思い出深い経験と語るのが、2018年に上演された梅田哲也『インターンシップ』。現代アートの世界でも活躍する梅田は、音や光といった現象や、建物や土地そのものの特性を活かした作品をつくるアーティストで、この作品ではKAATの舞台機構や、それを操作したり機材を動かしたりといった技術スタッフの身振り自体を作品の軸にすることを構想した。

しかし「舞台技術はあくまで手段であって、表現ではない。舞台技術は表現の先には行かない」を持論とする堀内にとって、梅田の作品は理解の難しいものだった。距離を縮める転機になったのは「海では波の音や風の音が作品を構成することもある」という作家の一言。「梅田さんにとって、劇場機構が出す音は自然音、そこで役割を果たすスタッフはそこに生きるかもめのようなものかもしれない」と解釈することで、クリエーションは一気に前進した。「私の解釈を伝えると、梅田さんは『うーん？』というような顔をしていましたけどね（笑）」。

以降、スタッフの上演中の動き方、舞台機構が昇降するタイミングなど、KAAT側からアーティストへもさまざまな提案が示され、『インターンシップ』は見事な完成を見た。

対談

田井昌伸 × 長塚圭史

野毛大道芸実行委員長　　KAAT神奈川芸術劇場 芸術監督

1986年から始まった「野毛大道芸」は、横浜を代表する芸術祭のひとつです。
そこで、長塚芸術監督が田井実行委員委員長のもとを訪れ、
その始まりから、どのように街とともに発展していったのかを伺いました。

取材・文＝尾上そら、写真＝河内彩

愛するわが町のために
全ては酒場から始まった

長塚　開館から10年を経たKAAT神奈川芸術劇場ですが、これまでの発信は、どうしても普段から演劇を観る方に向けたものが多かった。県立の劇場なので、地域の方々との結びつきを色々な形でもっと広げていく必要があると、芸術監督就任以来考えているんです。

田井　私も、KAATには宝塚歌劇を観に一度だけ行ったことがあるだけなので、馴染みがあるとは言えませんね。

長塚　舞台芸術への興味に関わらず、色々な方に足を運んでいただけるよう劇場自体を開かれた場所にし、僕らも作品もどんどん町へ出かけていく。そのためには劇場について知っていただく機会を増やさなければいけないので、リニューアルした広報誌では県内の、異業種の方に会いに行きお話を伺う「神奈川へ、会いに」という連載も始めました。

田井　一回目は、横浜中華街発展会協同組合の高橋伸昌理事長と話されていましたね。

長塚　はい、そして今号のテーマは「街と芸術」ということで、大道芸の聖地・野毛に伺わせていただきました。残念ながら本番をナマで拝見できていないのですが、動画で観た凄まじいまでの賑わいには鳥肌が立ちました。

田井　ここ2年は感染症禍のため、延期や屋内で規模を縮小した開催になってしまっていますが、町中で開催すると10万人からのお客様がいらっしゃるので、やはり盛り上がりますよね。

長塚　地域の住民が運営の中心を担い、町おこしのため始まったイベントが30年以上の歴史を持ち、全国区で認知もされている。僕らが学ばせていただく知恵や工夫がたくさんあるはずですし、同時にご苦労もあったのではないでしょうか？

田井　確かに山あり谷ありでした。長塚さん、野毛についてはご存知ですか？

長塚　いえ、何度か飲みに来たことがある程度で、今日は町の歴史などもぜひ伺いたいです。

田井　野毛は労働者の町。三菱重工業横浜造船所で一日三交代制で働く工員さんが仕事終わりで昼も夜も飲みに来るし、港で船の荷を揚げ下ろしする沖仲仕（おきなかし）さんたちは仕事にあぶれても飲むという（笑）、酔いどれを迎える飲食店で栄えた、女性が一人で歩けないような町でした。でも造船所が移転し、みなとみらい地区の再開発が進むなど人の流れが変わり、次第に活気を失っていった。これではいかんと立ち上がったのが僕より一世代上の野毛商店会の店主たちで、町を盛り上げ、お客さんを取り戻すために何かしなければという話になったそうです。もちろん真面目な会議などではなく、酒場に集まって飲みながらの話ですが（笑）。

長塚　最初から「大道芸をやろう」という話になったんですか？

田井　1985年の初回は、野毛のメイン通りに絵画や古物を並べて売る青空画廊をやりました。でもこれが惨憺たる状況で、全く受けなかった（苦笑）。そこで、次はどうしようと、また酒場で話し合うんですが、文化的な活動に興味のある店主が集まるパパジョンというバーがあって。そこに、パントマイムの本場パリのソルボンヌ大学で講師も務めたパントマイマーのIKUO三橋さんもいらして、話すうちに大道芸がいいのではないか、という話になったそうです。翌年からは三橋さんのプロデュースで、大道芸のフェスティバルをすることになりました。

長塚　野毛の町には大道芸がハマる、という確信があったんですか？

田井　いやいやいや！　みんな一杯気分で盛り上がって話しているので、その場の勢いでしょう（笑）。でも結果的に、道行く人が垣根なく楽しめる大道芸は野毛という町に馴染みが良かった。僕は、野毛の町全体を一つのサーカス小屋みたいだなと思っているんです。国内外の芸人さんが集まり、腕を競い、技を披露し、ノリの良いお客さんがそこに惜しみない拍手と投げ銭を贈る。野毛大道芸のお客さんは、投げ銭を弾んでくださるので有名なんです。

長塚　あの盛り上がり、熱気の中にいたら財布のひもも緩みますよね。

田井　最初の頃は芸人さんにギャラが払えなくて、交通費と昼食に鰻屋の鰻丼、350mlの缶ビール1本でお呼びして、後は投げ銭でという形だったんです。それでも皆さん喜んで参加してくださるし、打ち上げの盛り上がり方も半端なかった。立ち上げた第一世代は僕の親父世代より少し若いくらいの方たちで、僕ら若造に仕事もさせるけれど、必ず酒や食事をご馳走してくれるので、楽しみながらどんどん深くハマっていく。初期は年1回、今は春と秋の2回開催しますが、それぞれ3か月くらい前から夜な夜な準備をし、みんなで飲むという、いわば大人の学園祭ですね。

長塚　ほぼ一年中が学園祭！　しかも、どんな準備や仕事をしていても、最終的に酒場に戻ってくる感じがすごく良いですねぇ。

田井　仕事の合間を縫って、時には夜遅くまで準備にかかり、当日は食事も摂れずに一日中走り回る。でも楽しさが勝っているから、長く続けて来れたんです。7町会の青年会、その代表格が第一世代に誘われ、育ててもらいながら引き継いで今に至りますが、まさか自分が実行委員長になるとは思ってもみませんでした。

イベントは町と共に変わり続ける

長塚　僕らも今年春、劇場のエントランスに仮設の舞台をつくり、棋士の坂田三吉を題材にした『王将』という芝居をやったんです。本当なら出店なども出して、通りすがりの芝居を観ない人も一緒にお祭り気分を味わえるような空間にしたかったんですが、感染症禍のため今回はそうした賑わいづくりは諦めました。他に、2月の『冒険者たち』は「西遊記」をベースにして僕が作・演出する新作です。神奈川県に紛れこんだ三蔵法師の一行が行方不明の猪八戒を探しつつ、天竺に戻るため県内を西へ西へと旅するという設定で。これも2年に一度、間は空いても長く上演しようと考えている“劇場を飛び出す”演目です。

田井　面白そうですね。

長塚　是非、劇場にもいらしてください。野毛大道芸の、今の課題というとどんなことがあるのでしょうか？

田井　実行委員やボランティアさんの高齢化、後継者不足ですね。僕が既に66歳。家業はとんかつ屋で「パリー（ぱりいち）」というんですが、こちらも後継ぎがおらず、実行委員の次代を担う世代の店主たちも、子どもが店を継がないで独立してしまうなど、“仕事を他の誰かに任せて抜け出し、大道芸の準備に”という動き方ができない人が増えているんです。お陰様で、外から意欲的な若い世代の店主が営むバーや、海外で修業したシェフのレストランなども町に入り、若い顧客も増える傾向にはあるのですが、そういう店主たちは町の行事にあまり興味がなく、参加してもらうのは難しくて。近隣の大学から授業をかねてボランティアで参加してくれる学生さんたちも、3年次から就職活動に入る昨今では、手伝ってもらえるのは2年まで。こういう悩みはきっと、全国の町おこしイベントの現場に共通していると思います。

長塚　地域の、町の、その時々の状況とイベントや行事が密接に絡み合い、様相を変えていくのだと田井さんのお話しでよくわかりました。そこに厳しい現状があることも。

田井　もちろん、暗い話ばかりでなく横浜の関内と関外が合同で行う新たなイベントなども動き出していますし、まだまだ挑戦できることはあると思っています。KAATさんとも協力できることがあればいいですよね。

長塚　是非、僕たちも混ぜていただきたいです。

田井　発信力のある長塚さんですから、大歓迎ですよ！

野毛大道芸

横浜の野毛の街を舞台に35年以上も続く、大道芸や大衆演劇などの一大イベント。コロナ禍の2021年は横浜にぎわい座で開催した。ちなみに、実行委員長の田井さんは、とんかつの名店「パリー」の店主でもある。
https://nogedaidogei.com/

REVIEW

KAAT キッズ・プログラム 2021
『ククノチ テクテク マナツノ ボウケン』

2021年 7月12日（月）— 7月19日（月）
KAAT神奈川芸術劇場〈大スタジオ〉

振付・演出：北村明子
美術：大小島真木
出演：柴一平、清家悠圭、
岡村 樹、黒須育海、
井田亜彩実、永井直也

あふれる生命力、ダンスの“見えない力”を信じて

文=高橋森彦（舞踊評論家）

とある夏休みの公園。男の子が一人で遊んでいると、亡き友が現れ、精霊の森に誘われる。そこでククノチ（木の神様）に導かれ、大好きだったおばあちゃんと再会する——。鬼才・北村明子が初めて手がけたキッズ・プログラム作品は彼岸と此岸を行き交う物語だ。

北村は長年異分野・異文化と交わりながら独自の舞踊宇宙を生んできた。強靭でしなやかな踊り、土俗と洗練が溶け合う世界観を通して生と死の根源を問う。今回は気鋭の現代美術家である大小島真木との協同作業。耳、手、骨などの奇っ怪なオブジェ、それに色彩豊かに表される森林によって、観る者は異界へと引き込まれていく。6人の演者が時に繊細に触れ合い、時に四肢を力強く用いて踊るダンスは生命力にあふれている。

開演前にお面作り体験と5分間のダンスレッスンが行われた。観客は終盤に行われる儀式の際にお面を付け、演者と共に踊る。死者の世界のような不可視な事象を立ち上げ、人間の心の奥底に眠る記憶を呼び覚まし、舞台と客席が一体となるのはダンスだからこそ。北村は、その“見えない力”を信じる。子供たちと、かつて子供だった大人たちの感受性と想像力の翼を広げてくれる、かけがえのないひと時だった。

撮影=大洞博靖

『湊横濱荒狗挽歌～新粧、三人吉三』

（みなとよこはまあらぶるいぬのさけび～ しんそう、さんにんきちさ。）

2021年 8月27日（金）— 9月12日（日）
KAAT神奈川芸術劇場〈大スタジオ〉

作：野木萌葱
演出：シライケイタ
出演：玉城裕規 岡本玲
森優作 / 渡辺哲
山本亨 ラサール石井ほか

演者の魅力が光る はみだした人々の物語

文=岡﨑 香（演劇ライター）

シーズン制を導入したKAATの第1作は、今シーズンのテーマ“冒(ぼう)”と、アートに寄りがちな劇場をもっと地域に根差した身近な存在にしていこうという気概が伝わってくるものだった。気鋭の劇作家・野木萌葱が自身の出身地でもある横浜を舞台に脚本を書き下ろし、シライケイタが演出を担当。若手からベテランまで揃った充実のキャストで、河竹黙阿弥の名作『三人吉三』をモチーフとした任侠劇を繰り広げた。

撮影=宮川舞子

『三人吉三』は同じ名を持つ3人の盗っ人が軸になった名刀と金百両を巡る因果な物語だが、本作で描かれるのは、横浜博で得た５億の裏金の行方と1人の女(村岡希美)を巡る、2人の暴力団組長(ラサール石井、山本亨)と1人の悪徳警官(渡辺哲)の攻防。15年前に消えたその5億円を探そうと結託するのが、彼らの3人の子供たち(玉城裕規、岡本玲、森優作)で、そこには兄妹だと知らずに恋仲となる『三人吉三』の十三郎とおとせのエピソードも見て取れる。若い3人もいいが、やはり熟練たちの演技に目を奪われる。モチーフと大きく違うのは、しがらみの中で生きてきた親と同じ道を進むかと思われた子供たちが、因果の鎖を断ち切り、物語の舞台となっている坂の途中にある寂れたホテル「鯨楼」(アウトローの溜まり場ゆえ、悪食のクジラの腹の中にたとえられる)から海を目指して出ていくところ。まさに“冒”—飛び出す、はみ出す、突き進む—結末だ。望むらくは、もう少しケレン味ある演出や仕掛け、湊町横浜の風景が目に浮かぶようなセリフがあれば。とはいえ、時間を超越しているような鯨楼の支配人と、人ならぬ人形(ヒトガタ)を含め、登場人物にはそれぞれの俳優の個性が生きていて魅力的だった。

『近松心中物語』

2021年 9月4日（土）— 20日（月・祝）
KAAT神奈川芸術劇場〈ホール〉ほか

作：秋元松代
演出：長塚圭史
音楽：スチャダラパー
出演：田中哲司 / 松田龍平、
笹本玲奈 / 石橋静河、
朝海ひかる、石倉三郎ほか

シンプルな空間に浮かび上がる秋元戯曲の“要”

文=松岡和子（翻訳家・演劇評論家）

群生する彼岸花や森進一の演歌といったニナガワ印はいったん大切にしまったうえで、この『近松心中物語』に臨もうと思い、現にそうしたのだが、開幕前に劇空間を目の当たりにして、あまりのシンプルさにほとんど呆然とする。上手下手に重なる縦長の相似形の額縁。それらに挟まれ奥に向かってゆるい坂をなす床面は、彼方と此方を往還する道となる。

シンプルで何もない空間であるだけに、「劇」はあらかじめそこに在るのではなく、次第次第に現れてくる。おかげで劇中の人々の輪郭も佇まいも関係もくっきりと浮かび上がる。

とりわけ登場人物が二人の場面でその効果は際立つ。いやむしろ、このシンプルな空間が『近松心中物語』という劇には、人物が二人きりの場面が圧倒的に多いということを知らしめたと言うべきか。ざっくり見て全体の七割ほどもあろうか——忠兵衛と八右衛門、お亀と与兵衛、お今と与兵衛、そしてもちろん梅川と忠兵衛。こんなにも個的な芝居だったのか。様々な「二人きり」の場面でも特に強い印象を受けたのは、忠兵衛が梅川を身受けするための手付金五十両を与兵衛に借りに来る傘屋の場だ。男同士の親密と共感。

秋元松代は、近松門左衛門の浄瑠璃「冥途の飛脚」を主筋とし、「緋縮緬卯月の紅葉」と「卯月の潤色」を副筋とし、西鶴作品なども綯い合わせて『近松心中物語』を書いた。梅川忠兵衛の悲劇のプロットとお亀与兵衛の悲喜劇とが交差する要が、他でもない忠兵衛と与兵衛の場面なのだ。二人を同郷の幼馴染にしたのも、与兵衛を「寿命のくるまで」生かすという「喜劇」の要素を入れたのも、秋元の工夫である。

撮影=阿久津知宏

舞台美術や人々の動線まで、音楽（鉦の音）から明かり（行灯や提灯）まで、端正な美に貫かれたこの舞台は、戯曲『近松心中物語』について多くの発見を促すのだった。作者の独創に目を据えた演出の妙と、俳優たちの魅力の賜物である。

KAAT EXHIBITION 2021『志村信裕展 | 游動』

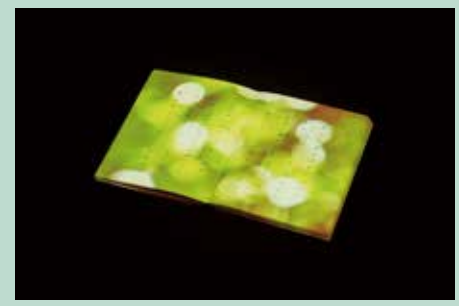
2021年 9月9日（木）— 10月8日（金）
KAAT神奈川芸術劇場〈中スタジオ〉

場所が持っている物語が歌声のように語りかけてくる

文=タニノクロウ（劇作家・演出家）

志村さんは場所から作品を生み出していくことが多い。古民家や薄暗い路地裏、寂れた商店街、古い銭湯など様々な場所に自身が撮った映像を映し出す。その場所が持っている物語をすくい、思いを巡らし、ドキュメンタリー的な映像で「現在」を載せるのだ。

すると、その場所の風化した深層が生命を受け、現在に向けて何か語りかけてくるように感じる。それは、あの覆面ストリートアーティストが放つような強烈な悲鳴や訴えではない。優しく柔らかい歌声のようだ。



撮影=加藤 健

今回の展示は劇場で行われた。劇場内は歩く足音が響くほど静かで、空気はひんやりしていた。そこに点在する様々なオブジェに映像と舞台照明が照射されている。白いカーテン、木枠の窓、ベンチ、ガラスの浮き玉、古書など。自由に回遊するようにその一つ一つが近くで見られる仕様になっていて、音を立てないよう気をつけて歩き回る自分が、まるで深海生物になったかのように体感する。周りを見ると皆同じように動いている。その鑑賞者たちの作り出すリズムも「水・光・月」という今回のモチーフを一層際立たせていた。

そして、無音の空間に聴覚を研ぎ澄ませると、オブジェたちの放つ無数の歌声に包まれていることに気付かされる。

KAAT DANCE SERIES 2021 × Dance Dance Dance @YOKOHAMA 2021
『エリア50代』

出演：小林十市、近藤良平、
23日ゲスト 安藤洋子、
24日ゲスト SAM(TRF)、
25日ゲスト 伊藤キム、
25日ゲスト 平山素子

2021年 9月23日（木・祝）— 9月26日（日）
KAAT神奈川芸術劇場〈大スタジオ〉

50代の本気と意地と技が全面に

文=凜

「50代の肉体をもって何ができるか」という小林十市の思いのもと、国内で活躍する50代のダンサー6人が集った「エリア50代」。企画の軸となる小林と近藤良平は連日、ゲストダンサーの安藤洋子・伊藤キム・SAM・平山素子は日替わりで、ソロダンスを披露した。本企画のキモは、50代ダンサーのソロということに加えて、ダンサーが自身とは異なる振付家とタッグを組む、という点にある。小林はフランスの振付家アブー・ラグラ、近藤はMIKIKO、安藤はウィリアム・フォーサイス、伊藤はハウスダンサーのBOXER&Hagri、SAMは能楽師・佐野登、平山は舞踏の笠井叡と、自身のジャンルとはまったく異なるタイプの振付家と組むことで、自身の“域”を超える動きに挑戦することになり、結果、各作品とも50代の本気と意地と技、そして色気が全面に出る内容となった。

またダンスの前後にはトークタイムが用意されていて、作品の背景や互いの日常が、ダンサー自身の言葉で語られた。ストイックな動きを披露した直後、振りを覚える難しさや自身の身体の変化について屈託なく話すその様に、自身の身体と向き合い続けてきた人たちならではの共感と実感が滲み出ていた。

小林十市「One to One」　撮影=鈴木穣蔵

KAAT DANCE SERIES 2021 × Dance Dance Dance @YOKOHAMA 2021
Noism Company Niigata × 小林十市
『A JOURNEY ～記憶の中の記憶へ』

2021年 10月16日（土）— 10月17日（日）
KAAT神奈川芸術劇場〈ホール〉

演出振付：金森穣
出演：Noism 0、Noism 1、
小林十市

時代を超えて受け継がれる舞踊の遺伝子

文=立木燁子（舞踊評論家）

撮影=瀬戸秀美

生身の身体に刻印され継承されていく舞踊の知と技法。Dance Dance Dance @ YOKOHAMA 2021の掉尾を飾った新作『A JOURNEY ～記憶の中の記憶へ』（2部構成）は改めて舞踊の確かな系譜を実感させた。ともに現代バレエの巨匠、モーリス・ベジャールの薫陶を受け、国際的に活躍する小林十市と新潟を拠点にNoism Company Niigataを率いて活動する金森穣との初のコラボレーション。小林を主役に、演出振付を金森が担当した。偉大な師へのオマージュと引退年齢に差しかかった名ダンサーへのエールが込められた希望に満ちた逸品。

過去の舞台写真を後ろに旅立とうとする男性（小林）に若者（金森）が駆け寄り踊り出す冒頭の場面（『追憶のギリシャ』）が素敵だ。ハジダキスの曲に乗った絶妙のデュエット。女性（井関佐和子）そして男女が集まり、次第に動きが増幅する。『BOLERO 2020』（音楽：ラヴェル）が始まり、ダンサー達はやがて円陣を組み、俯瞰のカメラが宇宙的な眼差しで見つめる。

第二部『The 80’s Ghosts』では、欲望に支配された人間の姿を批判し革命について言及するベジャールの声が響く。仮面をつけた印象的なソロに続き、巨大な群衆の映像が挿入され、ミラーボールの光が劇場全体を揺らす。巨匠の記憶を胸に、男性＝小林は若いダンサー達とともに新たな旅路へと踏み出す。

長塚圭史、かながわの街に出没中！

小田原城から箱根駅伝のコースを辿り駅伝ミュージアム、芦ノ湖や箱根神社。海老名市の国分寺跡、寒川神社、横須賀のどぶ板通り商店街、厚木、川崎、大和、綾瀬、相模原など各地のホールや文化施設まで、稽古や公演の合間に、長塚芸術監督はかながわ中を巡り、色々な人たちに出逢い、刺激をもらっています。かながわは広く、そしておもしろい!!

藤棚商店街にて

この経験は、2月から県内7ヵ所をツアーする『冒険者たち ～JOURNEY TO THE WEST～』に生かされます！ ツアー中も、どんどん出掛けますよ！

今日はKAATに何しに来たの？

観劇やアート鑑賞、街散策など、さまざま目的でたくさんの人が集まるKAAT。
そこで、秋のある1日、KAATを訪れた人たちに「今日は何しに？」と声をかけてみました。

写真＝河内彩

共通質問
Q1 今日は何をしにKAATに来ましたか？ Q2 お住まいは近所ですか？
Q3 KAATにはよく来ますか？ Q4 KAATのことはどこで知りましたか？
Q5 KAATの好きなところは何ですか？

50代 男性 映画宣伝会社勤務

Q1 劇団た組の「ぽに」を観に来ました。松本穂香さんのファンで。Q2 世田谷からです。Q3 KAATの会員なので年に4、5回は来ています。『王将』はよかったですね。Q4 白井前監督の芝居を観に来たことがきっかけです。Q5 作り手がのびのびと芝居をやっているような環境がいいと思います。「冒」っていうテーマがどうなっていくのか楽しみです。

40代 女性 事務員

Q1 NHKホールでやっている放送コンテスト県大会に息子が出ているので、家族で応援に来ました。Q2 茅ヶ崎市に住んでいます。Q3 初めて来ました。Q4 放送コンテストをきっかけに知りました。Q5 KAATのことは知りませんでしたが、車でここの前を通って「冒」のポスターに目を奪われました。「冒!?」って。インパクトがありますよね。

長塚圭史の思いつき

これからの新しいKAATを探るなら、そのヒントは長塚芸術監督の頭の中にあるはず。
そこで、「長塚さん、最近どうですか？」と、今ぼんやりと考えていることを聞いてみました。

11月に自分の劇団で久々の新作を上演し、改めて観客のみなさんは演劇の参加者であると感じました。KAATには「街にひらかれた劇場」というミッションがあるんですが、終演後、近くのカフェで役者と観客が入り交じって話をしたり、バックステージツアーで作品の裏側を知ったりと、舞台と客席が地続きになるようなことができないかと考えています。今回は、野毛大道芸実行委員会やホテルニューグランドで興味深いお話を伺いました。僕らが横浜のいろんな場所に出向くことで、街の人にKAATに興味をもってもらったり、KAATに観劇に訪れた人が行き帰りに横浜の街を楽しんだり、少しずつ街に根付いた劇場になるようにいろんな試みをしたいと思っています。

※ご意見・ご感想をぜひツイッター・インスタグラムに「#kaatpaper」を付けて投稿してください。
もしくはkouhou03@kanagawa-af.orgまでメールをお願いいたします。

〈第2回〉

神奈川へ、会いに〈ホテルニューグランド〉

長塚新芸術監督が、今、気になっている街の人にふらっと会いに出かけます。
第2回目は横浜を代表する老舗クラシックホテル
〈ホテルニューグランド〉会長兼社長・原信造さんを訪ねました。

写真＝河内彩

長塚　ここのホテルは歴史がありますよね。

原　もう94年になりますね。関東大震災後の復興の一環として1927年に開業しました。

長塚　今日改めて建物の中を色々と拝見しましたが、このフェニックスルームもどこか日本の神殿を思わせる和の設えで、和洋が絡み合ったオリエンタルな雰囲気がとても素敵です。

原　豪華なホテルは造れても、こういうホテルはもう二度と造れないんじゃないかと思います。

長塚　あと、驚いたのが中庭も含めて誰でも入れるようになっていること。敷居の高いイメージがあったのですが……。

原　そうなんです。散歩している人もいますからね。

長塚　神奈川芸術劇場も、このホテルのようにもっとひらけた場所にしたいと思っているんです。コロナで難しい面もありますが、近隣の皆さまと交流を深めていく機会を作っていきたいという思いがあります。

原　そうですね。皆さんで協力して、この辺りが楽しい街になればいいと思います。ホテルとしては、劇場とホテルの親和性があると思いますので、どちらも楽しんでいただけるような、そういう連携も深めていければ。

長塚　本当におっしゃる通りで、僕としては夜公演をやりたいと思っているんですよ。夜に公演を観て、近くで食事して、泊まって……そんな週末を過ごす場所になればいいなと。

原　演劇を観たあとに食事をしたり、大人の時間を過ごせたらいいですね。このホテルにも良いバーがありますよ。英国調のバーで、落ち着いて演劇の余韻に浸っていただけるような場所です。

長塚　実は僕もせっかくホテルがある地域なので、色々なホテルにちょっとずつ滞在していこうと思っているところです。

原　そういえば作家の大佛次郎がむかしこのホテルに住んでいましたよ。

長塚　やっぱり泊まる習慣って大事なのでしょうね。僕も何回かこの地域に泊まったことがあったのですが、朝は公園が見えて気持ちがいい。それに、滞在することで地域との密着が深まって一気にクリエイターの意識が高まるんです。

ちなみに、館内でイベントをされたりすることはありますか?

原　ありますよ。レインボーボールルームというステージがある宴会場でディナーショーをしたり、中庭でガーデンチャペルをしたり。中庭で野外劇をしたら面白そうですね。

長塚　いいですね。今までは「入っていいのかな……」という感じでしたがお芝居をやっていいと嬉しいお話もいただいたので、ぜひやりましょう。

KAAT　公演スケジュール　2021−22　WINTER

12月3日(金) − 12月5日(日)	OrganWorks2021-22『ひび割れの鼓動-hidden world code-』	大スタジオ
12月9日(木) − 12月11日(土)	横浜国際舞台芸術ミーティング 2021　(YPAM2021)　カンパニーデラシネラ『TOGEアトリウム』	アトリウム
12月10日(金) − 12月12日(日)	横浜国際舞台芸術ミーティング 2021　(YPAM2021)　Dance Base Yokohama『DaBYパフォーミングアーツ・セレクション』	大スタジオ
12月11日(土) − 12月12日(日)	横浜国際舞台芸術ミーティング 2021　(YPAM2021)　オル太『生者のくに』	中スタジオ
12月17日(金) − 12月18日(土)	KAATフレンドシッププログラム / YPAM連携プログラム　タイ語アニメーション『hesheit』	アトリウム
12月17日(金) − 12月18日(土)	横浜国際舞台芸術ミーティング 2021　(YPAM2021)　ヤン・ジェン『Jasmine Town』	大スタジオ
12月17日(金) − 12月19日(日)	横浜国際舞台芸術ミーティング 2021　(YPAM2021)　劇団態変『さ迷える愛・序破急』三部作一挙上演	ホール
12月17日(金) − 12月19日(日)	横浜国際舞台芸術ミーティング 2021　(YPAM2021)　カンパニーデラシネラ『TOGE』	中スタジオ
12月22日(水) − 12月26日(日)	『劇団四季のアンドリュー・ロイド＝ウェバー コンサート〜アンマスクド〜』	ホール
12月24日(金) − 12月26日(日)	KAAT DANCE SERIES 2021 『Le Tambour de soie 綾の鼓』	大スタジオ
1月12日(水) − 1月16日(日)	地点 『ギャンブラー』	大スタジオ
1月13日(木) − 1月16日(日)	パルコ・プロデュース2022 『ロッキー・ホラー・ショー』	ホール
1月21日(金) − 1月23日(日)	Baobab 第14回本公演 Re:born project vol.4-5 『UMU-うむ-fusion edit.』/『笑う額縁』	大スタジオ
1月28日(金) − 2月6日(日)	Co.山田うん新作 2022 『ストラヴィンスキープログラム』	大スタジオ
1月28日(金) − 2月6日(日)	ミュージカル『新テニスの王子様』 The Second Stage	ホール
2月8日(火) − 2月16日(水)	KAATカナガワ・ツアー・プロジェクト 第一弾 『冒険者たち　〜JOURNEY TO THE WEST〜』	中スタジオ
2月18日(金) − 3月6日(日)	KAAT神奈川芸術劇場プロデュース 『ラビット・ホール』	大スタジオ
2月19日(土) − 2月25日(金)	宝塚歌劇星組　神奈川芸術劇場公演 『ザ・ジェントル・ライアー 〜英国的、紳士と淑女のゲーム〜』	ホール

※情報は11月25日現在のものです。変更となる場合がございます。ご了承ください。詳細は、各公演のウェブサイトをご確認ください。

KAAT 神奈川芸術劇場

〒231-0023 神奈川県横浜市中区山下町281
TEL.045-633-6500(代表) FAX.045-681-1691
https://www.kaat.jp

〈電車でお越しの方〉
- みなとみらい線：渋谷駅から東横線直通で35分！横浜駅から6分！日本大通り駅から徒歩約5分。元町・中華街駅から徒歩約8分。
- JR根岸線：関内駅または石川町駅から徒歩14分。
- 市営地下鉄：関内駅から徒歩14分。
- 市営バス：芸術劇場・NHK前すぐ。
  横浜駅前東口バスターミナル　2番のりば乗車(所要時間約25分)
  桜木町駅前バスターミナル　2番のりば乗車(所要時間約10分)

※上記のりばから発車するバスはすべて「芸術劇場・NHK前」を通ります。ただし、148系統急行線を除く。

指定管理者：(公財)神奈川芸術文化財団

KAAT神奈川芸術劇場では新型コロナウイルス感染拡大予防対策を徹底し主催公演を実施します。ご来場前に必ず、劇場HPの「ご来場のお客様へのお願い」をご確認ください。

季刊誌 神奈川芸術劇場 KAAT PAPER 冬号(年4回発行)　2021年12月11日発行　発行＝KAAT神奈川芸術劇場　編集＝伊藤総研(伊藤総研)、原田茉央(伊藤総研)、松田美保　アートディレクション＝高田 唯(Allright)　デザイン＝齋藤拓実(rough)　デザインコーディネート＝高田 舞(Allright)　イラストレーション＝ひだかもと